

## 孫娘

バタンと音がした。

目が覚める。

ソファで居眠りをしてしまったらしい。

「ああ、ここは東京」

ぼんやりした頭で彼女は考える。

あれは、そうするとドアが開いた音かしら。

誰かが走っている。

また、ドアが閉まる音がする。

しばらくすると水音がした。

彼女は思わず笑顔になる。

あの忙しさは、けいちゃんに違いない。

トイレくらい、学校ですませてくればいいのに。

「おばあちゃん、ただいまあ」

ようやくご当人が、顔を見せる。

手には、コンビニの小さな袋。

「おかえり、けいちゃん」

今時の子は、帰ってきてても、

「おなかすいた、おなかすいた、死にそうだ」って言わないんだねえ。

おばあちゃんは、そう思ってけいちゃんを眺める。

起きるのがなんとなくきつくて、ソファに横になったままだ。

まあ、あたしだって人がいるのに、横になっているんだから、同じかしら。

行儀の悪いこと。

以前だったら考えられないことだわ。

けいちゃんは、菓子パンをむしゃむしゃ食べている。

「ねえ、おばあちゃん」

「ねえねえ、おばあちゃん」

けいちゃんは忙しい。

おばあちゃんに話しかけ、携帯メールを打ち、菓子パンを食べる。

もう少し落ち着けないものかねえ。

おばあちゃんはそう思うが、案外若い子の速度はこんなものかもしれない。

けいちゃんは、左手で二個目のパンを器用に袋から出し、右手で携帯を操る。

「けいちゃん、外から帰ってきたら手洗いうがだよ。大切なことなんだから。」

ようやく起き上がって、おばあちゃんは言う。

「うん」

しばらく間があって「はい」と言う返事があった。

「うん」を「はい」に言いかえるけいちゃんが、おばあちゃんには可愛らしい。

「トイレで手は洗ったよ。」

おばあちゃんは、けいちゃんの言い訳に思わず笑う。

「はいはい。」

あれはねえ、指が行水しただけですよ。」

「おばあちゃんて落ち着いているよね。」

かっこいい。」

立ち上がると、太ももあらわな制服のスカートからパン屑を落とす。

「のろいだけですよ。」

年取るとね、自分ではせっかちにやっているつもりでも、はたから見ると、いらいらするくらい遅いのよ。

亀だって、あれで自分では早く走っているつもりなのよ。」

「ははは」

けいちゃんは笑う。

ただ、携帯片手だから、本当は何に笑っているのか、おばあちゃんにはよくわからない。

携帯メールがひと通り終わったのか、けいちゃんはこちらに顔を向ける。

「おばあちゃん、いつまでも元気でいてね。」

おばあちゃんは思わず笑ってしまふ。

「そうはいきませんよ。」

けいちゃんの気持ちはありがたいけど。

静かに死なせてね。

いつまでもお小遣いをあてにしても、無理よ。」

「ひどおい。」

けいちゃんは立ちあがり、冷蔵庫のドアを開ける。

また、なにか食べるらしい。

おばあちゃんはあきれて、孫娘の後ろ姿を眺める。

気持ちよく口に入っていく食べ物。

その結果の、みごとな太もも。

筋肉質だから、見えていて気持ちがいい。

浅黒くて、息子そっくりだ。

食べ終わると、けいちゃんはひまなのか、スクワットを始める。

「けいちゃん、おばあちゃんがソファにいと邪魔かい？」

「そんなことないよ。家にだれかいるなんてことないから、けっこううれしい。」

息もきらさず、スクワットを続けながらけいちゃん  
は言う。

自分にもこんな時があったのだと、けいちゃんを見

ながらおばあちゃんは思う。

信じられないことだけど。

遠く遠くの記憶の中に、友達と走り回っている自分がいる。

いつのまに、時は過ぎてしまったのだろう。

幼い頃のこと。

息子を育てていた頃のこと。

息子があまりにやんちゃで、近所に謝ってばかりいた頃のこと。

息子が出て行って、ひとりで暮らしていた頃のこと。

浅黒いけいちゃんがスクワットをしている。

息子が相撲をしていたところと重なって見える。

あれは小学校？

いろんな時期が、彼女の頭の中でごっちゃになる。

「おばあちゃん、寝ちゃった？」